

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2025 No.42

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

特集 卒業生×学習支援センタースタッフ対談 大学生活と自己成長—社会の第一線で通用する確かなチカラ— … 1
 2025年度 第1回 LSC セミナー報告 … 3 第15回教育力アップセミナー参加者からの声 … 4 第81回LSCドキュメンタリー・アワー開催報告 … 5
 LSC 資料紹介・SPOD フォーラム 2025 参加報告 … 6 初年次教育学会第18回大会 参加報告・第20回リメディアル教育学会 参加報告 … 7
 大学教育学会 2025 年度課題研究集会 参加報告・<学び★サプリ>オンライン授業と対峙する … 8

特集 卒業生×学習支援センタースタッフ対談

大学生活と自己成長

— 社会の第一線で通用する確かなチカラ —

2005年度に学習支援センターが設立してから、今年度で20年となる。これまで多くの学生を支援し、社会へ送り出して来たが、学習支援センターで培った力がどのように社会で役立っているのかを確認するために卒業生とセンタースタッフの対談を企画した。在学時、毎日のように学習支援センターを利用して来ていた2016年度法学部国際政治学科卒の松本一晋氏（現在は大日本印刷株式会社情報イノベーション事業部で営業担当として活躍中）と当時英語学習アドバイザーとしてセンターに勤務し、現在はセンター次長の馬場崎賢太准教授が対談し、当時の活動と現在の活躍についてうかがった。以下、松本氏＝松 馬場崎＝馬

□毎日のように通った学習支援センター

馬：松本さんには入学直後から会ってますよね。たまたま福岡県で同郷の先輩の結婚式に参加した時「高校の教え子が進学するからよろしく」と言われて。「いつも来てくれるこの学生さんか」と思ったのを憶えています。

松：入学直後の、センターが現在の協創館ではなく、別の建物にあった頃から通い詰めていて、2年次に協創館に変わってからはまさに入り浸っていました。

馬：毎日来てすごく頑張っている学生さんがいるな、という印象は強く残っています。センターを知ったきっかけは何でしょうか。

松：正直、福岡からやってきた入学当初は、他大学への進路変更も含めて将来を考えていました。そんな中、学生の本分は勉強だから、まずは勉強で良いスタートを切るにはどうしたら良いかという思いがあって。入学後自分の勉強を見てもらえると知ってからすぐにセンターに通い始めましたね。

馬：英語の勉強も熱心にしていましたけど、中国語なども頑張っていましたよね。

松：昔のことも憶えてもらってるんですね。あの頃、大学の広報物はすべて読んでいて。OBの方で外務省に就職された方の記事があって、広島修道大学からそんな進路も選べるんだって驚きました。そういう進



路を選べる可能性があるなら英語や中国語もやらなければ、と思ってセンターで毎日勉強していましたね。同様の思いで国際交流サークルにも入りました。

馬：入学時にある程度こういう風になりたいという目標は固まっていたということですか。進路変更も考えながら学生生活がスタートした中で、広島修道大学で頑張ろうと切り替えができたのは、どのくらいの時ですか。

松：1年次の後半ですかね。とにかく入学直後から全力で動いてみて、大学の良さを知る努力をして。1ヶ月間中国の西南政法大学での留学にもチャレンジして、その後学内で行われた中国語作文の朗読大会で金賞を取れた時、「やればできる」という自信をもつことができ、その頃から「広島修道大学で」ますます能動的に動くという思いが出てきました。

□プレゼンマスターズの挑戦

馬：センターではいつも、相談するというよりは、企画する側として色々動いているタイプでしたよね。

松：2年次の後半くらいに、留学生のパディを経験して。過去と現在のパディ、これから挑戦してみたい人をつなぐパディ会を立ち上げたんです。で、募集のプレゼンをした時、綺麗に作り上げた自信作だったのに、

特集



思いのほか反響がなくて(笑)。そこで自分に何が足りなかったのか知りたくて、センターの学習アドバイザーに相談に行って、周りの人も巻き込んでプレゼンをしてみようということになりました。

馬：伝説の「プレゼンマスターズ」の誕生ですね。あれはすごい企画でしたね。しゃべるのが得意ではない人も集まったってのがすごく面白い団体でしたね。

松：20人くらいの学生で年間17回活動していましたね。授業でもプレゼンは経験しますが、与えられた課題の発表内容を評価するのがメインで、手段であるプレゼンはあまり評価されない。話す・伝えるスキルの獲得にフォーカスしたものが何かできないかと思い活動を始めました。具体的には効果的なデータの見せ方や、ダイアログ（相互理解を深めるためのコミュニケーション手法）の研究などを行いました。当時メンバー募集をする際、より話す力を鍛えたいという人が集まるかなと思っていたんですけど、苦手だからこそ頑張りたい人や、傾聴のスキルに長けた人など様々なタイプの人が集まってユニークな団体になりました。みんなで考えて好きなことやって良いよというスタンスもよかったですと思います。2人のプレゼンターが同一テーマで順に話し、他のメンバーが話し方、姿勢などの12項目を5段階で評価する、というイベントも行っていました。プレゼンする側も、聞いて評価する側も一生懸命、本気の活動ができたと思います。

馬：センターはどのような形でサポートに入っていたのでしょうか？

松：とにかく、漠然としたやりたい気持ちを相談するところから、カタチにするところまで伴走してもらいました。自由に新しいことをやって良いよという環境と雰囲気は常にあったのはとても助かりました。アットホームな雰囲気があり、いつも誰かがセンターにいて相談に乗ってくれる。「こういうことしたいんだけど、どうしたら良いですか？」という希望を常に持ち込んでいました。当時は、あふれる熱意はあったけど、知見はなかったの。漠然とした希望を論理的に整理して学術的知見と紐づけてくれたことが活動に説得力を与えてくれました。

馬：まさにアドバイザーとして機能していたということですね。

松：プレゼンのテーマ選択も、ディベートなどのように勝ち負けを決めるためのものではなく、普遍的なテーマで実施しました。そういうテーマだったからこそみんなが

色々考えながら能動的にできたのが良かったと思います。

馬：プレゼンマスターズも他の企画もそうですが、後輩たちが自分たちで新たな企画を生み出して、活動を継承していくってケースもたくさんありましたよね。

松：ビブリオバトルとか色々ありましたね。フォローはするけどメインは後輩に任せて、後輩にもとにかく成功体験を積んで自信をつけて欲しいという思いがありました。あとは、とにかく人に頼られるのが嬉しかったですね。そこが頑張る原動力になったと思います。

□学生時代に身につけた社会で通用するチカラ

馬：学生時代、どの部局のピア活動でも松本さんを見ないことはないくらい活動的でしたが、学生時代に身につけた力が今第一線で活躍する中で役に立っているということはあるですか？

松：プレゼンマスターズやキャンパスリポーターなどの活動を通して、きちんと相手に物事を整理してから伝える力が身につき自分に自信がついたことですね。就職してからも、どのような話す場面においても臆さず意見を明確に伝えていける。あとはうまく伝えるにはどうしたら良いかを考える力がつきました。今でも仕事でプレゼンをする時はこだわりをもって内容を作り上げますし、原稿を手書きで作るこだわりも昔から変わっていません。そのための努力や労力を苦難ではなく楽しいと感じることができると、学生時代の活動が活きていると思います。

馬：同じやるなら苦勞と思わず楽しく、これは良いですね。卒業式の時、卒業生総代として答辞で「とにかくまずは行動しよう」と話をされていましたよね。ご自身が22歳の時の仲間へのメッセージですが、今の修大生に伝えたいことも同じですか？

松：「まず行動」とは今でも本気で思いますね。何か始めないとわからないことだらけなので。本当に質の良いものをわかろうと思ったら、最初は質が悪くてもたくさん行動して経験を積むことが大事。そこから良いものは何かと考えることができるようになります。

馬：これだけ活動した人が言うと言説力がありますね。でも誰しも初めてのものに飛び込むのは怖いじゃないですか。

松：小さなトライ&エラーで良いので、経験して小さな成功体験を積み上げていくのが大事だと思うんです。みんな最初から大きいものを狙っていくから失敗が大きくなるし、怖くて動けない。小さい努力と成功が折り重なって大きく見えるものになっているっていうのを理解できれば、小さなトライがたくさんできるようになります。資格のスコアのように、数字とかデータでわかりやすく見える価値も大切ですが、見えない部分の価値というものも学んで欲しいと思います。

とにかく動いてたくさん挑戦したい私には、今の会社がとても合っていると思います。私の会社の良いところは、失敗を咎めず、やりたいことを好きにやって良いよという社風です。ブランドステートメントが「未来のあたりまえをつくる」ですし、失敗を恐れず社会のため、お客様のためになることに挑戦する。そして自分たちにしかできないものを作り上げて世の中を便利にしていきたいという目標があります。行動を大事にするということは今も昔も変わりませんね。

2025年度

第1回

LSC セミナー報告

学習支援センター次長 馬場崎 賢太

2025年10月31日(金)に2025年度第1回LSCセミナーを開催しました。講師には、Ronride株式会社 代表取締役の高山善光先生をお招きし、「生成AIで何ができるか～教育現場での活用～<初心者編>」というテーマで開催しました。高山先生は、民間企業でデータサイエンティストやプロダクトマネージャー、データ分析ツール開発等を経験したのち、現在はアカデミックライティング学習アプリの開発を通して、生成AIによる教育環境の改善に取り組んでおります。昨今、教育現場における生成AIの活用方法が話題となっており、大学に在籍する教職員が生成AIをどのように活用できるのか、その可能性と課題等について情報提供していただきました。また、今回のセミナーでは実際に参加者がPCを用いて生成AIの操作を体験していただきました。

セミナーの最初に生成AIの一般的な理解を概観しました。「人工知能」、「機械学習」、「ディープ・ラーニング」、「生成AI」などの用語とその概要を理解し、これまで行われてきた活用法やその仕組みについて理解しました。また、生成AIの活用例として、高山先生が作成された動画が紹介され、従来は膨大な費用と労力が必要であった動画や教材制作が、生成AIによる自動化で大幅に効率化されることが示されました。生成AIの登場によってまるで人間の思考と同一のものが出力されるようにも見えますが、高山先生の解説によると実際は生成AIは思考しているのではなく「思考しているように見せかけて」いるのだということです。その例として、「勉強ができない学生の学習習慣を調べたいので、カブトムシの生態について教えてください」といった一貫性のない質問を生成AIに入力してみると、生成AIの限界を理解することができました。生成AIの「自然にみせかける」能力を活用する例として、「情報の整理」、「作業的な会話の自動化」、「文章/コードの生成」が挙げられ、参加者はそれぞれの専門分野のキーワードを用いて論文の要約や一覧表を作成したり、履歴書を作成するためのフォーマット作成の方法を学んだりしました。また、レポート評価に生成AIを活用するための練習として、プロンプト設定のワークを行いました。

また、生成AIを正しく使いこなすためには目的にあったプロンプトを入力することが大切であることを理解するために、さまざまな指示文を入力し、それぞれの出力の比較を行いました。

高山先生は、生成AIの活用に必要なのは扱う人自身のアカデミックスキルであり、批判的思考や問題発見・解決能力によって、そのタスクを「何のためにやるのか」を自分で明確にし、出力された結果を自分で批判できることが重要であること、また、教育現場で生成AIを活用する鍵は「主従を逆転させないこと」だと強調されました。



生成AIに依存すると批判的思考が十分に育たない可能性があります。教育現場での利用方法は十分に考えて行われるべきでしょう。そのための利用方法案として、「いつでも質問可能なTA」や「議論の相手」としての活用方法などが例として挙げられました。そして、参加者同士のグループで「どうすれば主従を逆転させない利用ができるか」を話し合いました。

AIを活用する大学生はすでに多く存在し、教育者側もそれを前提とした課題設計や評価方法を再考する必要があります。アカデミックスキルの基本要素（批判的思考、課題発見・解決能力、意思決定力）は、生成AIに置き換えられない能力であり、教育現場ではそれらを早期から育むことが必要です。AIの利用が一般化しつつある現在、教育現場の私たち一人ひとりが考えながらその活用法を模索しつづけることが大切だと感じました。今回のLSCセミナーには、教員13名、職員12名、合計25名の教職員に参加していただきました。今回のセミナーでの学びがこれからの本学の教育実践の中で有意義に生かされていくことを期待しています。



第15回

教育力アップセミナー

参加者
からの声

他府県出身者から見た広島と修道

人文学部准教授 佐藤 量



2025年9月9日に開催された第15回教育力アップセミナー「組織的な教育力を高めるために」に参加し、教育手法に関する学びにとどまらず、他府県出身者として広島という地域や本学が置かれている状況をあらためて考える機会となった。

2025年春に私は京都から本学に着任したが、着任直後から耳にすることが多かったのが、少子高齢化や若者の人口流出、そして広島ではごく日常的に使われる「転出超過」という言葉であった。全国的な人口減少の中でも、中国地方、とりわけ広島は若年層の流出が顕著であり、その影響が大学の将来像や学生募集に直結していることを会議や日常的な会話の中で実感してきた。しかし外部から来た者にとっては、この独特な言葉がどこか抽象的で、十分に腹落ちしない部分もあった。

今回のセミナーでは、IRデータをもとにした議論を通じて、地域が直面している人口動態の変化と大学の課題が密接に結びついていることが具体的な数値として示された。その結果、本学が置かれている状況をより現実的に理解することができ、大学の将来とも関わる現実であると認識できた点は、大きな気づきであった。

他方で、当日のグループワークで印象に残ったことは、本学には修道出身者や広島出身者の教職員さんが多いことである。みなさんの発言や視点には、地域や大学への深い愛着がにじんでおり、他府県から来た私にとっては、広島や本学を理解するうえで多くの示唆を得ることができた。地域のことを理解するためにも、今後もいろいろなお話を聞いてみたいと感じている。

アクティブ・ラーニングの手法として体験したジグソー法も、本セミナーを通じて得られた大きな収穫であった。セミナー後には、この経験を踏まえて私が担当する社会調査法の授業で取り入れ、学生のグループワークとして実践した。学生がそれぞれ調べてきた内容を持ち寄り互いに説明し合う過程では、課題に主体的に取り組む姿が見られた。なかでも印象的であったのは、議論の中で学生の大学や地域に対する思いが自然に語られていた点であり、ここでも地元への愛着を感じる事ができた。

本セミナーを通して広島や本学への理解が深まる契機となったことと同時に、授業実践へのヒントも得ることができた。「転出超過」という課題を抱える広島ではあるが、その一方で、教職員や学生に共有されている地元や大学への強い愛着は、本学にとって大きな財産であり、前向きな可能性でもあったと感じた。今後も地域と大学の関係を学び続け、本学の教育力向上に貢献していきたい。

教育力アップセミナーを通して

学生センター 沖西 美沙

本セミナーでは、異なる部署の職員や教員で構成された4人1グループになりグループワークを行いました。まず初めに、一人一人リサーチ・クエスチョンを設定しました。リサーチ・クエスチョンとは、複数のデータを用いて課題解決をするための議題を指し、どのようなデータを組み合わせると議題を解決できるのかを考えました。私は、リサーチ・クエスチョンに「学生のサークル部員の減少」を設定しました。その上で、学生のサークル所属情報データと学生の出身高校データを用いて課題の解決策を検討できると考えました。具体的には、学生のサークル所属情報と学生の出身高校との相関を調べることで、どこの高校がどの部活に力をいれているのか、どこの高校の学生がどのサークルに興味を持ちやすいかを調べることが出来るのではないかと考えました。それぞれの高校の傾向が分かれば、高校訪問などで大学の授業内容だけではなく、より本学に興味を持ってもらえる課外活動の魅力を伝えることができ、広島修道大学への進学を検討する可能性が広がるのではないかと考えました。

次に、「入学志願者を増やすための施策」はどうすればよいかという課題解決に向けて、課題に関係のあるいくつかのデータ分析を行いました。グループ内でそれぞれのデータ分析を担当し、習得をして、グループで共有するというジグソー法を用いてグループワークを行いました。グループの4人それぞれが入学志望動向などの入試データを分析するという点で、読み取りが難しいところもありましたが、他部署の職員や教員と一緒に情報を話し合いながら読み解くということを通して、普段交流しない方と意見を共有し合えたことはとても勉強になりました。

本セミナーでは、本学の現状と課題、改善策についてデータ分析より検討することだけではなく、教職員の相互理解を深め、今後の課題改善に向けた協力関係を作ることを目的としていたため、データ分析を通して他部署の方や教員と交流できたのはとてもよかったと感じました。普段は主に自分自身の部署内での業務がほとんどですが、他部署や教員の方とやり取りする機会も少なくないため、データ分析での交流だけではなく本セミナーの初めに行ったアイスブレイクにて、それぞれの所属部署の業務内容を共有できたことは、これからの業務につなげていくことができると感じました。

第81回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

LSC ドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。取り上げたテーマに対する独自のアプローチに触れられる機会になっています。

地域社会の民俗学—「村系ホラー」を超えて—

人文学部准教授 三隅 貴史

近年の日本では、主人公が「因習に支配された村」から必死で逃げようとするホラー作品が流行している。また、2014年の「地方消滅」論以後、「人口減少・高齢化によって、地域社会は『限界集落』化していく。これを解決するために、何らかの手段によって、地域を活性化させなければならない」という、地方社会に対する「ものの見方」が広く受け入れられている。

だが、地域社会を、「遅れたもの」「理解不可能なもの」とする「ものの見方」には、多くの問題がある。そして、実際には、私たちが地域社会から学ぶべきことが、数多くある。それは例えば、自分たちの地域を自分たちで手入れするという、よりよい「自治」のありよう、人間と自然が関わりあうことで自然を保全するという発想、そして、有事の際に助け合えるコミュニティの重要性などである。

以上について、本企画では、『柳川堀割物語』（1987年）を元に解説した。この映画は、スタジオジブリの高畑勲氏が監督を務め、宮崎駿氏も関わった「実写ドキュメンタリー映画」である。上映時間が167分あるため、当日は「プロローグ」と「第10章 自然を生かし共に生きる—城堀水落ち—」の一部（約20分）を上映した。

なぜ「村系ホラー」と「地方消滅」論と『柳川堀割物語』の3つを（無謀にも）結びつけ、解説するという、本企画を実施したのか。

1つ目の理由は、「村系ホラー」から民俗学に関心を抱く学生に対してどのように向き合うのかという問いに、1つの答えを出したかったからである。初回授業で、「私は民俗学者です」と自己紹介すると、学生から出される質問は、「調査の中で一番怖かった体験はなんですか？」というような、「村系ホラー」を引きずった質問である（回答：「村系ホラー」的に怖い思いをしたことなんか一度もないよ！調査協力者に失礼だよ！）。担当者は、民俗学の専門家として、学生の関心を尊重しつつも、偏見にとらわれることの問題を指摘しなければならないと考えた。本企画は、その試みである。

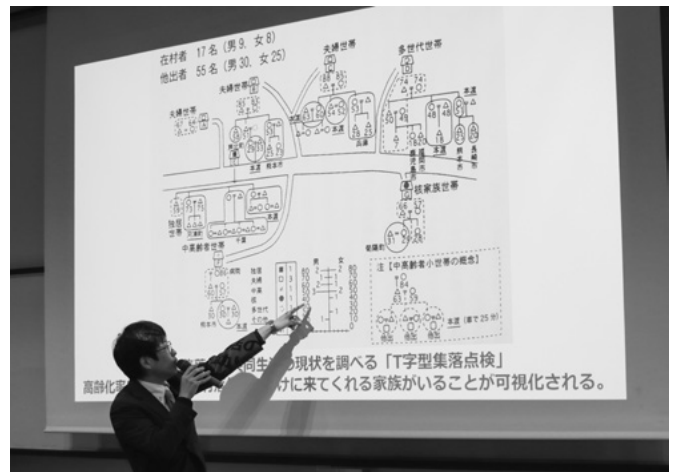
2つ目の理由は、いわゆる「地域活性化」に興味を持つ学生に対して、「地域活性化」を相対化する「ものの見方」を知っておいてほしいと、担当者が常々考えているからである。担当者は日本の大規模祭礼に対して、地域外から自

身の楽しみなどを目的として参加する人々の研究を行ってきた。加えて担当者は、「地域つながるプロジェクト」で、「大学生による地域活性化」にも関わっている。その意味で、担当者も「地域活性化」と親和性が高い研究者である。

だが、担当者の研究には「地域外参加者を動員して、地域の祭り・祭礼を盛り上げ、過去の賑わいを維持し続けることは本当に正しいのか？」という批判が、しばしば寄せられる。この批判は、傾聴する価値があると担当者は考えているため、これを参加者と共有したいと考えた。終了後のアンケートを見る限りでは、「地域社会は消滅寸前であり、活性化されなければならない」という「ものの見方」を相対化するという本企画の目的に、一定の共感を覚えた参加者もいたようである。

担当者は、2025年4月に着任した新任教員である。それ故に、本企画を通して、人文学部社会学科の学生だけでなく、他学部の学生や教職員の方々と意見交換ができたことは、大きな喜びであった。自身の関心について知ってもらえたことをきっかけとして、これからの大学での学びを充実させていきたい。そして、今後も、魅力的な地域社会を抱える広島県において、自身の研究と「地域活性化」との関係性について、悩める日々を過ごしていきたい。

なお、広島修道大学図書館では、2026年3月末まで「LSCドキュメンタリーアワー ミニ展示」が行われている。スタジオジブリ関係から「地方消滅」論批判まで、多様な本を図書館のスタッフに選書してもらったので、興味を持たれた方がいれば、是非とも関連書籍を手にとってもらいたい。





LSC 資料紹介

学習アドバイザー 中村 大輝

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センターまでお問い合わせください。

『20代からの文章読解 人文学的思考を鍛える「読み方」10講』

山野 弘樹著／大和書房(2025)



『考える』。その為に文字を学べ。本を読み。『物知りになる為』じゃないぞ。『考える為』だ。

これは、2025年に大ヒットした作品「チ。-地球の運動について-」（原作：魚豊）で語られる印象的な言葉である。学ぶことの本質が何かを知ることではなく、「考える」ことにある

ことが力強く示されている。しかし、ChatGPTなどの生成AIが文章を自動で生成し、インターネットで検索すれば瞬時に情報へどり着ける時代に、私たちはこの「考える」ことそのものを省略しがちになってはいないだろうか。古代ギリシア以来、人間が営んできた「考える」という行為の意味を問い直すうえで、本書は多くの示唆を与えてくれる。

本書は、その「考える」という営みを、学術文章の読解という具体的な実践を通して身につけさせて

くれる一冊である。筆者である山野弘樹氏は現代フランス哲学や「VTuber」を専門とする哲学者だ。本書の大きな魅力の一つは、批判的に考えることを生業とする哲学者による「批判的読解」の実践的入門書となっている点にある。実際の学術文章をもとに、「解釈をすること」や「問いを立てること」などの「批判的読解」に至るプロセスがどのように行われていくのかが丁寧に解説されている。学術文章に不慣れた学生や社会人には必読書ともいえよう。

本書がさらに興味深い点は、「批判的読解」の対象をテキストのみならず、世界へと広げている点だ。筆者は、私たちの認識が無意識的に世界の常識のようなものに規定されていることについて言及している（p.157）。それは、当たり前のようにありながら、「世界は別様であるかもしれない」という可能性を「考える」ことなしに放棄してしまっていると捉えることができる。筆者は、私たちのそのような状態に警鐘を鳴らし、本書を通して、考えさせない時代に抗う姿勢を示してくれている。

SPODフォーラム2025 参加報告

学習アドバイザー 村田 翔

2025年8月27日から29日に徳島大学で開催されたSPODフォーラム2025に参加した。今回、個人の能力開発や人材育成、TA・SA等に関するプログラムがあり、大学教職員の能力向上に関する手法を学ぶために参加した。

SD研修に関するワークショップでは、まずSDの目的について、単なる教職員の能力開発など人材育成に留まらず各大学の理念等を達成するためでもあることが話題となった。そのうえで、組織の戦略を実行し、目標を達成するための手段であるという観点が提示された。SD研修を構想するときには、どういう人材育成を目指すのかというビジョンや組織の目標を適切に考える必要があるとともに、研修を「Goal」から作っていくことや実施内容について「体系的・段階的・継続的」を意識して構想する重要性が示されていた。また、SDは基本的に大人を対象として行うために、学びをいかに自分ごととして捉えさせることができるのかがポイントであり、「腹落ち」させることが大切だと話していた。

指導補助者（TA）研修・プレFDプログラムに関するワークショップでは、まず東京大学と徳島大学の仕組みについて、実際の状況や研修のコンテンツ作りなどの観点か

ら話題提供があった。全体を通して、この分野は高等教育分野の中でもまだ研究対象として日が浅く、模索しながら取り組む状況が分かった。また、研修を一から作っている大学は少なく、各組織で公表されているFD・SDに関する動画資料を活用しながら行っている状況が多かった。しかし、実態として各大学の特性や実情によって大きく異なることも分かり、情報共有はできたが、ノウハウを上手く応用するには難しいと感じた。グループ協議では、私が実際に取り組んだTA・SA研修について共有させていただき、意見交換させていただいた。

今回多くの知見を得たり、多様な参加者と交流を深めたりすることができた。また、高等教育に関わる様々なネットワークがあり、学ぶ機会が多数存在することが明らかとなった。SPODフォーラムは四国地方の大学ネットワークによる研修会ではありながら、全国各地の大学教職員が多く参加している状況がみられ、非常に盛会であった。確かに、「敵対する」相手なのかもしれないが、同じ大学教育に携わる人間としてそれぞれの状況や問題点を共有し、協力できる場所は一緒に解決するなどの方策が今後必要になってくるのではないかと感じた。

初年次教育学会第18回大会 参加報告

学習アドバイザー 中村 大輝

2025年9月4日から5日に石川県立看護大学で開催された初年次教育学会第18回大会に参加した。テーマは「探究から研究につながる大学初年次教育」であった。

今年度に入学者の多くは、高等学校で「総合的な探究の時間」（以下、「探究」）が必修化されて以降、初めて大学に入学した世代である。「探究」は、大学入試を通じた接続にとどまらず、高等学校教育と大学教育を「教育接続」として捉えなおすことを目的の一つとしている。このような改革は、入学予定者に対して行う入学準備学習プログラムを担当する学習支援センターにとっても極めて重要な意義を持つものである。本学会においても、「探究」と初年次教育のつながりを意識したプログラムが数多く設定されており、本稿ではその中から特に印象に残ったものについて紹介する。

「探究から研究へとつながる大学初年次教育」と題されたシンポジウムでは、酒井淳平氏（立命館宇治中学校・高等学校）をはじめ、川島和代氏（石川県立看護大学）や安永悟氏（久留米大学）らが高等学校と大学双方の立場から行われた実践について報告した。高等学校側の報告では、高校での探究経験が、大学での自立的な学びへと発展する土台となる可能性が示された。その一方で、大学側が高校

生の探究経験をどのように受け止め、さらに伸長・深化させていくのかという支援の必要性も示された。また、大学側の視点からは「探究」を通して得られた問いが、学生が大学において主体的に学び続けるための重要な要素であることが示された。全体討論では、教育接続を進めるために、大学が高等学校での教育に関心を持つことが不可欠であるといった意見が交わされた。

こうした議論と関連して、「中学時代の探究経験が高校生の探究学習レディネスに与える影響－初年次教育への円滑な接続に向けた探索的検討－」（山田剛士氏ら・関西大学）は、特に興味深い発表であった。山田氏は、初年次教育の抜本的見直しを視野に、高校生が「探究」を始める際のレディネスについて調査した。その結果、中学校段階での探究経験が高等学校における探求レディネス、特に「自ら問いを設定する」力に有益な影響を与える可能性が示唆された。大学が高等学校にとどまらず、中学校を含む中等教育全体との教育接続を志向しようとしている点において、本研究は初年次教育の新しい視点を提示するものであり、学習支援センターにとっても示唆に富む内容であった。

第20回リメディアル教育学会 参加報告

学習アドバイザー 藤田 香織

2025年9月8日から10日に中央学院大学で開催された第20回リメディアル教育学会（RERSJ）大会に参加した。20周年記念大会として開催された本大会は、「リメディアル教育の過去・現在・未来」をテーマに、激しい社会変化の中で学生の学習支援が果たすべき役割について、多角的な知見が共有された。特に、「日本語能力の重要性」と「メタ認知能力の育成」が、現代の学生支援の核となる二大テーマとして浮き彫りになった。

【日本語能力の重要性】

前橋工科大学の河内健志氏はL1（母語）である日本語の運用能力とL2（第二言語）である英語の運用能力に強い相関があることを示した。高い日本語能力は、単に英語学習を助けるだけでなく、論理的思考力を高め、「社会人として生きる力」や「分析する力」の基盤となることが強調された。

これは、英語の学習相談においても、基本的な日本語の文法構造を説明する必要に迫られる現場の実態と一致する。まずは土台となる母語の力を高めることが、全学的な学力向上、特に国際的な能力育成の前提であるという認識を強くした。

【メタ認知能力の育成と協同学習の可能性】

学生が自らの学習を客観的に把握する「メタ認知能力」

の育成が、学力向上の鍵として複数発表で取り上げられた。

メタ認知とは、自分自身の思考したものを、あたかも第三者のように客観的に捉え、把握し、そしてコントロール・調整する能力のことである。

群馬パース大学の山崎真氏（現在の所属：群馬県立県民健康科学大学）は、睡眠時間や学習時の携帯電話使用の有無とメタ認知能力に相関が見られ、自己制御力としてのメタ認知が学習習慣に影響を与えることを明らかにした。

また、北海学園大学の青木千加子氏は、英語ライティング指導では、チャットシステムを用いた協同学習が学生の英語に対する公表への抵抗感を下げ、優秀な学生の英文を参考にすることで、全てのライティングスコア（納得度、言語の気づき、知識の構築など）を向上させる相乗効果を述べた。協同学習が、心理的な抵抗感を下げ、学習効果を高め合う環境を作る可能性が示唆された。

本学会の参加を通して、全学共通教育、特に日本語教育と英語教育が連携し、「日本語能力」という強固な土台の上に「英語能力」や「論理的思考力」を構築する必要性を痛感した。次年度の学習支援をより効果的に進めるため、メタ認知能力の育成を促す授業設計や、日本語教育との連携強化を検討したい。

大学教育学会2025年度課題研究集会 参加報告

学習アドバイザー 藤田 香織

2025年11月15日から16日に東京大学本郷キャンパスで開催された大学教育学会2025年度課題研究集会に参加した。

課題研究シンポジウムでは大学教育における生成AIの急速な浸透と、それに伴うAI時代に求められる「自立した書き手」の育成について問題提起がなされた。

まず、学生の利用実態として、2025年3月の読売新聞記事によると、全国の国公私立大学31校へのアンケートで生成AIを「継続して利用している」学生は50%に達しわずか1年で22ポイント上昇しているという衝撃的なデータが示された。この現状に対し、教育現場では「AIによる代筆(カンニング)」への警戒が強いものの、関西学院大学の実践報告では、適切なワークショップを経ることで学生の意識が「不正ツール」から「思考の補助リソース」へと変化する様子が報告された。

特に注目すべきは、AI利用と学習成果の相関である。米国の事例によれば、A+評価の学生はAI出力を批判的に吟味し自身の論点を盛り込む一方、B評価の学生はAIの生成文をそのまま提出する傾向があることが指摘された。また、英語の要約ライティング支援システムを用いた実証研究では、同じクラスの学生の中での熟達者モデルを提示しパラフレーズを促すことで、3語以上の一致(コピペ)簡

所が劇的に減少し、文章の質が向上したという具体的な成果も示された。

今回のシンポジウムを通じて最も痛感したのは、「AI禁止」というフェーズは完全に終わり、今後は「AIを使いこなしつつ、いかにして人間独自の思考を守るか」という高度な教育リテラシーが求められるということだ。特に印象的だったのは、関西学院大学の調査で約30%の学生が「自分のプライドが許さない」「自分のためにならない」として一貫してAI利用を避けているという点だ。利便性のみを追求する層と、自己の成長を重んじて距離を置く層の二極化が進んでおり、後者のような「自立した書き手」の精神をいかに全学生に広げていくかが、今後の指導の鍵になると感じた。

また、2026年以降は「1人1台端末」が当たり前前の世代が大学に入学する。彼らにとってAIは「外付けの脳」に近い存在であり、従来の「結果(レポート)」だけを評価する手法はもはや限界を迎えている。今後は、アイデア出し、構成、リビジョン(修正)といった「執筆プロセス」にAIをどう介在させ、そのプロセス自体をどう評価するかという視点が、本学のカリキュラム設計においても不可欠であると強く認識した。

<学び★サプリ>

2025 Vol. 29

オンライン授業と対峙する

学習アドバイザー 村田 翔

コロナ禍を経験した教育現場では、オンラインを用いた学習が定着しつつあります。その手法も様々であり、例えば小学校で小規模校同士をオンラインでつなぎ、授業内で意見交流を促進する取り組みが行われているなど、新たな教育の形による実践が進められています。

そして大学では、他の学校種よりもオンライン授業が一般化しています。各大学の事情や授業の性質によって異なりますが、一部の授業は全てオンラインで実施するなど状況は千差万別でしょう。メリットとして、学生はいつでもどこでも授業を受講できるため、時間や場所に制限されず自分のペースで学習を進められます。また、繰り返し視聴できるため、理解度に応じた学習を行うこともできます。このオンライン学習は、「個別最適な学び」として非常に有効的であり、学習者自身で学びを深めるチャンスになります。

一方、デメリットも多く指摘されている中で「復習や課題を後回しにしてしまう」という意見がありました(本多2024)。また、オンライン授業の視聴や課題提出を忘

れていたために、単位が修得できなかったという状況も聞いたことがあります。これらは、いずれも自己管理能力が欠如していることに原因があるといえるでしょう。言い換えれば、学習者自身でオンライン授業と適切に「対峙」し、授業の状況や課題の有無など学習状況を管理することが出来れば、充実した学習になるとともに自己管理能力が高まるはずで、自己管理能力は大学生活だけでなく生涯必要な能力であり、大学での学びはその基礎を養うチャンスなのです。

オンライン授業は、大学生にとって避けて通れないものとなっています。決して楽できるものと捉えずに、適切に対峙し活用できればより深い学びに繋がるチャンスと言えるでしょう。

参考文献：本多薫(2024)：コロナ禍を経験した文系学生のオンライン授業における意識と課題—オンライン授業と対面授業の比較から—。山形大学人文社会科学部研究年報, (21), 191-209.

